

## [生活]

## 生活科の理念を具現する「生活・総合学習」の有効性に関する一考察

- 2年生「きぼうっ子たんけん隊」の実践を通して -

石田 浩久\*

## 1 問題の所在

## (1) 生活科の課題

生活科は、今求められている人間力の視点からの生きる力の育成に大きくかかわる教育活動である。子どもたちが、「自立への基礎」を確実に身に付けられるように、その教育的意義を踏まえた実践が行われる必要がある。しかし、中央教育審議会は、生活科の実践上の課題として以下の内容を指摘している<sup>1)</sup>。

- ・生活科がパターン化され、地域や児童の実態に応じ、2年間を見通した指導計画になっていない。
- ・児童の興味・関心や体験の中から生じる児童の思いや願いを生かしきれない授業が見られる。

また、大阪府教育センターカリキュラム研究室の調査報告は、以下の課題を指摘している<sup>2)</sup>。

- ・一部に画一的な教育活動が見られる。
- ・単に活動するだけにとどまっていて、自分と身近な社会や自然、人にかかわる知的な気づきを深めることが十分でない状況が見られる。

つまり、教科書に沿っただけの教育課程であったり、過去に作成した教育課程を何年も使用したりするなど、各学校独自の特色ある教育課程の編成が不十分であることが示唆されている。地域の環境や児童の実態に応じて、身近な人や社会、自然と直接かかわる活動や知的な気づきを大切に教育課程の編成が必要なのである。

## (2) 教科としての生活科と教育課程

木村(2003)は、学校における教科学習には、「人類の知的文化遺産の伝達」と「獲得した知識・技能を使いこなす能力の育成」という2つの役割があるとしている<sup>3)</sup>。そして、生活科は従来教科のように「はじめに教える内容ありき」ではなく、「教師が子どもと共に学習を創り出す」役割が大切にされる教科であるという。つまり、生活科は、学校が独自性を発揮して子どもに根ざした単元を開発し、子どもの知的な気づきを促していくことが求められる教科なのである。

また、生活科では、一人一人の子どもの思いや願いの実現に向けた探究的な活動を行いながら、対象とのかかわりを深めていくことが大切にされる。活動を通して得た知的な気づきは、科学的な思考や認識、合理的な判断、そして美的、道徳的な判断の基礎になる<sup>4)</sup> 学力につながるのである。そのことにより、子どもは、思考力、判断力、表現力、コミュニケーション力などの能力を培い、さらに、社会や自然、自分自身にかかわる学習の過程を通して、学校生活や社会生活において必要な習慣や技能を獲得している。子どもの生活や地域に根ざし、子どもの思考に沿った活動展開の中で、知的な気づきと自分自身への気づきが促されるとともに、各教科・領域の基礎となる力を同時に培うことが大切であると考ええる。

ところで、生活科は「子どもの主体性や体験を重視した学習活動が展開されること」「生きる力を育むことを前面にすえていること」といった教育原理において、総合的な学習の時間と同じである。自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え、問題の解決や探究活動に主体的・創造的に取り組む態度を6年間継続して育むために、生活科と総合的な学習の時間を一体にとらえた教育課程を編成することが必要であると考ええる。さらに、子どもの実態をとらえた上で、これまで子どもを育ててきた学校や地域の特色を最大限に発揮できるような学習活動を構想することが大切であると考ええる。

---

\* 上越市立大手町小学校

## 2 研究の目的

上越市立大手町小学校では、平成18年度より文部科学省研究開発学校の指定を受け、その教育課程の特例として、生活科と総合的な学習の時間を統合した領域を「生活・総合学習」として実施している。「生活・総合学習」では、特定の教科の枠や内容にとらわれずに、体験を重視した総合的な学びが成立するような新たな学習内容の開発・実践を行うことを目指している。とりわけ、低学年では、生活や地域との結び付きを大切に、核となる活動を中心に様々な活動を組織することで、子どもの学びを確かなものにするカリキュラムを開発することを目指している。

本研究は、生活科の理念を具現し、生活科と総合的な学習の時間を統合した「生活・総合学習」のよさを明らかにすることを目的とする。そこで、平成18年度第2学年の実践から、低学年における「生活・総合学習」の有効性について、子どもの具体的な姿をもとに検討する。

## 3 研究の視点～「生活・総合学習」の概念から～

### (1) 付けたい力の明確化

木村（2004）は、「子どもの生活科学習への思いについての調査研究—上越編—」の中で、子どもは「動植物に親しむ力」「伝達・表現力」「感謝の気持ち」「挑戦・努力する力」「課題解決の力」等が身に付いていることを実感しているとしている<sup>5)</sup>。総合的な学習の時間で培われる資質・能力には、問題発見力や行動力、判断力、情報収集・発信力、表現力、コミュニケーション力、自己評価力、共生力、他者と好ましい人間関係を作る態度などが大手町小学校の実践<sup>6)</sup>からも明らかになっている。

生活科と総合的な学習の時間の接続の面からも、子どもが思いや願い、問題意識をもって身近な環境に進んで働きかけ、主体的に活動する力が、最も大切であると考えられる。そこで、大手町小学校では、具体的な活動や体験を通して対象に進んで働きかけ、自ら学ぶ子どもの姿をとらえる観点として、これらを「創造的探求心」「コミュニケーション能力」「情報活用能力」「内省的な思考」「共生的な態度」の5つの資質・能力に整理し、「生活・総合学習」で培いたい力として設定した。

そして、「生活・総合学習」のねらいを「自ら課題を見付け、自ら学び、自ら考え、主体的に判断し、よりよく問題を解決する資質・能力を育てる。」と「学び方やものの考え方を身に付け、問題の解決や探求活動に主体的・創造的に取り組む態度を育てる。」とした<sup>7)</sup>。

### (2) 1年間を通した活動テーマの設定と重点化

1年間を通したテーマを設定することで、活動を細切れにすることなく、子どもの意識が連続・発展する取り組みとなる。細切れ型の小単元の積み重ねでは、子どもの活動性が十分に保障されないからである。そこで、活動内容を関連付けることで、ゆとりをもって子どもの学びを柔軟に受け止めたり、子どもの意識に沿った活動を展開したりすることができる考えた。

時間的ゆとりの中で活動が保障されてこそ、子どもの学びの広がりや深まりが生じ、知的な気付きが発揮されたり、子どもが楽しみながら挑戦したりすることができる。その際、生活科の8つの内容を全て網羅的に取り扱うよりも、児童の興味・関心や体験の中から生じる思いに重点化して活動テーマを設定する。その中で、子どもの生活に根ざした課題や活動を構想し、知的な気付きを深めていく。

### (3) 地域の特色を生かした活動内容の設定と保護者との連携

テーマを設定する際は、身近な人々や地域への愛着が深まるように地域素材を大切に、活動を通して知的な気付きが深まる活動の場や環境を工夫する。学校の周辺には高田公園があり、子どもが直接かかわり学ぶことができる自然や社会や人々の営みに存分にかかわることができる。高田公園探検を中核とした活動を構成することで、子どもが自ら学びを創り出していくことを期待する。

また、保護者が校外での活動のサポートや安全面への配慮等に直接かかわったり、子どもの学びを積極的に発信したりすることにより保護者との連携を深めていく。それにより、低学年「生活・総合学習」の実践について保護者の理解が深まり、子どもの学びを共に支えることができると考える。

### (4) 総合化する教科学習等との関連

人・社会・自然を一体的にとらえる低学年では、生活科を中核として他教科などとの関連を図り、横断的・合科的

な指導が行われる。そこでの学びが、社会科や理科、総合的な学習の時間へと発展する。

「生活・総合学習」においても、各教科で学んだことを総合化しながら学んだり、学んだことを他教科等に生かしたりすることで、より確かな学びが具現されると考える。そこで、教育課程全体を通して学習の時期や配列を工夫し、学習材や学習内容、学習方法等の関連を図り、学習活動で身に付けた知識や技能を生かして、問題解決を図ったり、考え方や表現方法に生かしたりすることができるようにする。そうすることで、子どもの学びの連続・発展を図りながら、学ぶ意欲や思考力・判断力・表現力などを一層培っていく。

#### 4 実践の概要

##### (1) 探検活動を中核とした年間活動構想～「きぼうっ子たんけん隊」年間構想～

1・2年生の子どもたちは、活動しながら考え、考えながら活動している。その中で、社会生活に必要な規範を習得したり、知識や技能を修得したりしている。具体的な体験を通しての総合的な学びが、「もっと〇〇したい」「〇〇がすきだ」「〇〇ができた」「〇〇がとくいだ」という思いや自尊感情を育み、自立への基礎を養っていく。

そのために、子どもが繰り返し対象にかかわる中から自分の問題を見出し、学びを連続・発展させながら対象とのかかわりを深め、自らの見方や考え方を広げ深められるような構想が必要である。その際、子どもの学ぶ姿を見取り、子どもの意識を大切にしながら知的な気付きや人とのかかわりが生まれるよう、内容を整理・統合して単元を構想することが、子どもの確かな学びにつながる。

そこで、地域のシンボルでもある「高田公園」を中核に探検を繰り返し、季節毎に活動を収束させ、新たな活動へと連続・発展させることをねらった。活動を通して、子どもは、自然や社会、友達とのかかわりを深めながら、自分への気付きが促され、「生活・総合学習」で培いたい5つの資質・能力をはぐくんでいくと考える。これらを具現する探検活動を中核とした年間活動構想表を表1に示す。

なお、「きぼうっ子たんけん隊」の内容には、生活科の内容の(3)「地域と生活」(4)「公共物や公共施設の利用」(5)「季節の変化と生活」(6)「自然や物を使った遊び」(7)「動植物の飼育・栽培」(8)「自分の成長」が、年間の活動の中に組み込まれている。(1)「学校と生活」(2)「家庭と生活」については、他領域や日常の生活を通して培っていくことができると考え、実践を行った。

【表1 平成18年度第2学年生活・総合学習年間活動構想表】

平成18年度 第2学年 総合学習 年間活動構想表 (105時間)

- ◇ 活動名 「きぼうっ子たんけん隊～大好き！高田公園～」
- ◇ ねらい 四季の高田公園探検を中心に、自らの思いや願いを基に友だちと協力して調べたり体験したりする活動を通して、地域の人や社会、自然に進んでかかわるとともに、季節の移り変わりや良さに気付く。
- ◇ 培いたい資質・能力
  - 【創造的探求心】 たんけん活動を通してやってみようや知りたことを見付け、積極的に対象とかかわりながら、季節の自然の特徴や変化を感じたり、様々な遊びを創造したりする。
  - 【コミュニケーション能力】 分からないことや知りたことを周りの人に進んで聞いたり尋ねたりするとともに、調べたことやまとめたことを友だちや家の人に分かりやすく伝えたりする。
  - 【情報活用能力】 分からないことや知りたことについて図書資料等を用いて調べたり、知っている人に聞いたりしながら、必要な情報を集め絵や文で記録する。
  - 【内省的な思考】 体験や活動でよくできたことやがんばったことを振り返り、学習したいことを見つけるとともに、高田公園の楽しさやよきを感じ取る。
  - 【共生的な態度】 友達と仲良く活動したり、友だちのやり方の良さに気づき、自分に取り入れたいしながら友だちと協力して計画したり、調べたり、まとめたり、発表したりする。

	4月	5月	6月	7月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
	<b>きぼうっ子たんけん隊</b>											
	<b>春探検</b> 春の公園や朝市を探検し、春の自然や物、人とかかわる。		<b>夏探検</b> 夏の公園や朝市、水族館を探検し、動植物など夏の自然や人とかかわる。		<b>秋探検①</b> 秋の公園や朝市を探検し、初秋の自然や物、人とかかわる。		<b>秋探検②</b> 秋の公園や朝市、里山などを探検し、木の実や落ち葉などの自然や人とかかわる。		<b>冬探検</b> 冬の公園や朝市、雪山などを探検し、冬ならではの自然や物、人とかかわる。		<b>きぼうっ子たんけん隊の1年間</b>	
	公園を利用している人たちの観察・かかわり											
きぼうっ子たんけん隊！大好き！高田公園！	<b>お花見探検隊</b> (お花見を楽しむ、屋台での買い物、友達とかかわる) <b>春の植物・生き物探検隊</b> (草花、自然とかかわり、草花遊び、新たな発見や驚き、気付き) <b>公園遊び探検隊</b> (遊具での様々な遊び、公共施設の面白さ、友だちと遊ぶ楽しさ・難しさ) <b>春の公園探検隊</b> (みんなで公園探検を行う、探検計画、約束やまじり、友達や人とかかわり、観察)		<b>お猫探検隊</b> (お猫で遊ぶ、遊を用いた遊び、ポット、水棲動物をつかまえる) <b>お猫の生き物探検隊</b> (水棲動物をつかまえる方法や工夫) <b>きぼうっ子水族館</b> (水族館の見学、飼育環境の工夫、水棲動物の飼育と観察、展示の仕方、水族館への招待、飼育生物との別れ) 水族博物館への展示		<b>ハスオウツング探検隊</b> (ハスを使った遊びや観察、利用者や管理している人たちとかかわり) NPOとの連携		<b>秋の公園探検隊</b> (落ち葉や木の実での遊び、落ち葉や木の実での創作活動、秋の虫観察、春・夏との違い) PTA親子活動 大手冬まつり		<b>雪探検隊</b> (雪遊び、雪遊び調べ、スキー探検、公園の冬の様子、自然の変化、雪国の楽しみや知恵) 雪のきぼうっ子公園(雪の楽しみ、雪の遊び作り)		人のいない静かな雪の公園、雪国の冬の楽しみ方、工夫 高田公園を中核とした1年間の探検を振り返り、思いを劇や歌などで表現する。	
	探検の仕方、約束やまじり、安全 取材活動の仕方、あいさつ みんなで楽しく遊べる工夫 お金の使い方		探検の約束やまじり、安全 採集用具の使い方 取材活動の仕方 情報の集め方と活用の仕方 生き物の扱い方と生命、環境		・公共施設の使い方 ・グループごとの探検計画の立て方 ・インタビューの仕方 ・紹介の仕方、表現の工夫		・きぼうっ子公園を作る(グラウンドに公園を作る、調査、インタビューの仕方、情報の交流、人・物・自然とかかわり、継続した活用と管理、安全) 保護者との協働		・雪のきぼうっ子公園の冬仕度(公園の冬、冬囲い、片付け作業)		・学習のまとめ方 ・表現の工夫 ・自分の成長	
	春の朝市たんけん		夏の朝市たんけん		秋の朝市たんけん		冬の朝市たんけん		雪の朝市たんけん			

## (2) 活動・体験が連続・発展する公園探検による学びの事例

1学期前半は、ほぼ毎週、高田公園に出かけて公園や自然、友達との出会いを重視して活動を行った。子どもは、草花遊びなどを通して春の自然に目を向けたりしながら、自然とかかわる楽しさを感じるようになった。また、友達と遊具で一緒に遊んだり、グループで計画を立てて行動したりすることを通して、友達とかかわる楽しさや公共心を身に付けていった。「高田公園たんけん」での様々な活動や体験を通して、子どもの興味や関心は多岐に渡り、活動が広がっていった。以下に、各期の核となる活動事例と成果を整理する。

### ① 事例Ⅰ「きぼうっ子水族館」

#### ア ねらい

夏の高田公園探検を通して、お堀の生き物など夏の自然や人に進んでかかわる。

#### イ 活動計画（全18時間）

- ・「お堀探検隊」⑧・・・お堀散策、蓮を用いた遊び、ボート、水棲生物つかまえ
- ・「お堀の生き物探検隊」⑤・・・水棲生物の飼育と観察、飼育の仕方と飼育環境の工夫
- ・「きぼうっ子水族館」⑤・・・水族館への展示、水族博物館見学、水族博物館への夏休み特別展

#### ウ 子どもの学びの具体

4回にわたるお堀たんけんでは、子どもは思い思いにお堀で遊び、ザリガニなどの生き物を捕まえるなどして楽しんだ。活動を重ねる中で、上手に生き物をつかまえようと用具を工夫したり友達と教え合ったりする姿が増えていった。更に、捕まえた生き物の世話の仕方についても本で調べたり、上級生に聞いたりするなどたくさんの情報を集め、問題解決に当たっていた。これらの体験での満足感が、夏休み中の上越市立水族博物館に展示しようとする活動の広がりにつながり、多くの水棲生物にふれる楽しさや飼育環境の大切さについて学びながら、生命を大切にしようとする気持ちを高めた。

一方、春からの繰り返しの公園探検でお堀のハスの生長を子どもたちは感じ取っていた。そこで、NPO団体の協力を得て、ハスの生態を学んだり、ハスの実やレンコンを食べたり、工作をしたりする活動につながったことで、お堀への思いがより深まっていた。

本活動との関連により、国語科「かんさつ名人になろう」では、飼育している水棲生物を詳しく観察したり、語りかけたりしながら、詳しく作文を書いていた。「スイミー」や「サンゴの海の生きもの」では、飼育活動や水族館探検での体験を重ね合わせながら関心を広げ、進んで作品を読んでいた。

### ② 事例Ⅱ「きぼうっ子公園をつくろう」

#### ア ねらい

これまで探検してきた高田公園を想起し、友達と協力して計画を立てたり作業を行ったりしながら、みんなが楽しめる「きぼうっ子公園」を校地内につくる。

#### イ 活動計画（全15時間）

- ・「きぼうっ子公園計画」⑤・・・「きぼうっ子公園」のイメージ、インタビュー調査、グループの話し合い
- ・「公園をつくろう」⑦・・・材料や用具等の準備、友達との協力、保護者の参加・協力
- ・「公園で楽しもう」③・・・開園式、友達や家の人への紹介、招待

#### ウ 子どもの学びの具体

これまでの高田公園探検で経験したことから、公園の楽しさや公共性に気付いた子どもたちは、身近な場所に「池」「花壇」「ベンチとテーブル」「家」「ブランコやすべり台、丸太渡り等の遊具」を設置したいと考え、保護者の参画を得ながら公園づくりに取り組んだ。

子どもは、友達と協力して材料を準備したり、保護者の協力を仰いだりしながら、工夫して公園づくりに取り組んだ。共に活動したり遊んだりすることによって、仲間意識を高め、協力して活動することの大切さを感じ取るとともに、様々な遊びを創造したりしながら活動を楽しんでいた。

また、インタビューを通して多くの人とかかわったり、自分の伝えたいこと・聞きたいことなどを適切に話す力が身に付くとともに、活動を通して気付いたり感じたりしたことをシートに詳しく書いたり、メモを用いて情報を整理したりする力が伸びた。

インタビューと併行して実施した国語科の学習を通して「話すこと・聞くこと」の技能の向上と定着が図られた。



また、算数科「表とグラフ」で学んだ統計処理力をインタビューでの情報整理に生かし、視覚的に図や表で整理する力が身に付いた。図工科では、これまでの高田公園とのかかわりを想起して絵画作品に表したり、「きぼうっ子公園」づくりを通して、思い切り造形活動を楽しんだりした。

### ③ 事例Ⅲ「雪のきぼうっ子公園」

#### ア ねらい

雪を使った楽しい遊びを工夫して創り出したり、多くの人を楽しめる「雪のきぼうっ子公園」にするために友達と協力したりしながら、雪国の冬を楽しむ。

#### イ 活動計画（全20時間）

- ・「冬のきぼうっ子探検隊」⑫・・・「雪遊び」、「妙高雪探検」、「雪の高田公園探検」、「レルヒ探検」
- ・「雪のきぼうっ子公園」⑧・・・雪の公園計画、雪の公園づくり、雪の公園紹介、高田の冬の楽しさ

#### ウ 子どもの学びの具体

子どもは、グラウンドや妙高で「雪探検」を行い、雪を楽しみながら様々な遊びを工夫するとともに、「冬の高田公園探検」や「町中探検」を通して季節感を感じ取っていた。とりわけ、「冬の高田公園探検」では、友達と気付きを共有し合い、様々な見方や感じ方に気付き、思いを広げながら、子どもたちは、高田公園への愛着を一層深めた。また、子どもは、これまでのインタビューの体験を生かして、様々な雪遊びを進んで調べたり、遊び方を工夫したりするとともに、国語科や図工科での学びを生かした「冬の高田公園ビンゴカード」を用いて探検を楽しんだりした。春・夏・秋と繰り返し探検を行ってきた高田公園であるからこそ、子どもは進んで公園の様子を調べたり、活動を楽しんだりした。そして、四季の高田公園の変化や公園への思いを、季節毎に歌や劇に構成した発表へとつなげていた。

### (3) 考察

子どもは、高田公園を中心にした繰り返しの探検活動によって、様々な自然の姿や多くの人と触れ合いの中で、5つの資質・能力を発揮していた。例えば、Mさんは「お堀たんけん」を繰り返す中で、次はもっとたくさん生き物を捕まえたいと思いが膨らみ、ペットボトルの仕掛けや釣竿などの道具を工夫しようとした。そして、友達と一緒に様々な道具を試しながら仲良く活動したり、捕まえた生き物の飼育の仕方を図書資料等で調べ、大切に飼育活動を続けたりした。このように、子どもは対象とのかかわりから自分の問題を見出し、解決していく過程で「創造的探求心」や「共生的な態度」「情報活用能力」を培っていた。さらに、「お堀たんけん」での生き物飼育の思いを「きぼうっ子公園」の「池づくり」につなげたHさんは、池の水が浸み込まないようにする方法を家の人に聞いたり、川について学習している上学年に尋ねたりして、調べたことや考えたことを仲間を紹介していた。このように、子どもは活動を通して学び方を身に付けたり「コミュニケーション能力」を培っていった。また、探検の後は、分かったことや初めて知ったこと、がんばったことや楽しかったことなど、自分の思いや感想を詳しく書くことができるようになった。さらに、高田公園への愛着や季節の変化や特徴への気付きが、作文に記された。これは、対象と自分とのかかわりが深まることで様々な気付きが生まれ、「内省的思考力」を発揮しながら、自分自身への気付きが促されていったことによる。これらは、付けたい力を明確にして臨んだ結果である。

また、年間を通して活動・体験を連続・発展させることで、子どもが対象にじっくりとかかわるゆとりが生み出された。高田公園での体験が、「きぼうっ子公園」づくりの活動に広がったり、「雪の高田公園探検」での見通しをもった活動につながったりした。このように活動テーマの重点化を図り、探検活動を中心とすることにより、子どもの意識が連続・発展する活動が可能となり、主体的な活動の広がりや深まりが生み出されるよさがあった。

そして、子どもにとって身近な環境や自分自身の内面からの課題を重視することが、子どもの関心を高め、進んで対象とかかわろうとする姿や感性的な気付きとして表れていた。子どもの学びを、保護者に学年便り等を中心に情報の発信を繰り返すことで、保護者の「生活・総合学習」への理解が深まり、協力体制が強固になった。特に、「きぼうっ子公園」や「冬たんけん」では、家族へのインタビュー活動を契機に、子どもの思いや願いが保護者との連携を促すよさがあった。これは、子どもにとっても保護者にとっても、身近な地域を題材にした継続的な活動内容を設定したことによる。

さらに、年間を通して一貫したテーマがあることで、他教科等との内容のかかわりや学び方の関連を図ったり、見通しをもって子どもに培われた力を教科学習に生かしたりしやすいよさがあった。例えば、「生活・総合学習」と関連させて各教科の学習を構想することで、子どもは一層、創造的探求心を発揮しながら「表現活動」や「造形遊び」

に取り組んだ。そして、教科学習で確実にした思いやアイデアを「生活・総合学習」で生かすことで、豊かな自己表出が行われた。

このように、「生活・総合学習」では、自分と人、社会、自然を一体的にとらえた総合的な学習活動により、子どもの主体性や体験を重視した総合的でダイナミックな活動を展開するよさが明らかになった。

## 5 成果と課題

### (1) 成果

- ・「生活・総合学習」により、6年間を通した学び方や系統的に培いたい力を焦点化した特色ある教育課程を編成することが可能になった。そして、6年間一貫した目標を貫きながら、子どもの自己形成を促していくことが出来るよさが子どもの姿から明らかになった。
- ・他教科等の関連を重視した一層総合的な学びとして、複数教科のねらいを同時に達成しようとする学習方法が、子どもの意識の連続性や時間的なゆとりを生み出すことができた。さらに、自分と人、社会、自然を一体的にとらえながら、教科学習との横断的・総合的な学習活動を展開することにより、子どもの思いや願いが広がり、新たな学びに発展したり、教科学習での学びが深まるよさを見出したりすることができた。
- ・生活や地域に根ざし、子どもの思考に沿った活動・体験の連続発展を図る柔軟な展開が可能となった。主体的な活動や体験を通して、5つの資質・能力を培うことができた。
- ・保護者との連携を深め、保護者と共に活動を創り出すことで、子どもの達成感や満足感が高まるとともに、保護者からの賞賛によって、子どもは自信や自尊感情を高め、自立への基礎をはぐくんでいた。
- ・生活科と総合的な学習の時間を統合した「生活・総合学習」の実践は、自立への基礎を培う生活科のよさを一層際立たせることができた。

### (2) 課題

- ・教育課程全体で人間力を培うための低学年期の具体的な体験を通した学びの在り方と6年間で学ぶ内容や学び方の系列性について検証を行い、子どもの成長の視点から低学年「生活・総合学習」の有効性を明らかにすること。
- ・幼児教育との接続の視点から、1年生入門期の「生活・総合学習」の在り方を検討すること。

## 【引用文献等】

<sup>1</sup>文部科学省 <http://www.mext.go.jp>

<sup>2</sup>大阪府教育センター <http://www.osaka-c.ed.jp/kak/karikenweb/seikatu/seikatu/seikatu.htm>

<sup>3</sup>木村吉彦 「生活科の新生を求めて」 2003 日本文教出版

<sup>4</sup>文部省 「小学校学習指導要領解説 生活編」 1999

<sup>5</sup>平成15・16年度科研費研究（代表：野田敦敬） 「生活科で育った学力の調査研究」 2004

<sup>6</sup>上越市立大手町小学校 「未来を創る子どもの学び」 2002

<sup>7</sup>上越市立大手町小学校 「人間力」 2007